NASVA療護施設における新看護プログラムの実践

矢作　伸一

独立行政法人自動車事故対策機構

【はじめに】当機構（NASVA）では紙屋克子筑波大学名誉教授のご指導の下、昨年4月から、6カ所の療護施設において自動車事故により遷延性意識障害となった患者に対して新看護プログラムを実施している。本報では、新看護プログラムを実施した複数の患者の諸データをもとに結果を考察する。【方法】療護施設で、1年以上遷延性意識障害の状態が継続している患者に対し、「生活の予後診断に基づいた」集中的な看護プログラムを実施する。実施方法は、専ら看護師による、1.温浴刺激看護療法、2.腹臥位による用手微振動、3.ムーブメントプログラムなどの実践である。対象患者は概ね4週間のクールの前後に各種データ計測を行い、実施効果の分析を行った。【結果】プログラムの実施前後で顕著な改善が見られた患者が出てきている。その一方でほとんど症状の変化が見られない患者も多いことがわかった。改善事例としては、拘縮の緩和やそれに基づく座位の確保などであり、この結果、摂食能力や排泄能力にそれまで認められなかった顕著な改善がなされた事例も紹介する。実践を通じて四肢末梢の血流改善による皮膚温の上昇が認められた患者もいた。【考察】新看護プログラムの実施により、患者が潜在的に有する身体の開放能力やこれまでの治療で引き出せていない残余の改善能力が本プログラムの実施により短期間で改善につながったものと推定する。統計的な裏付けをするところまでは至っていないため、本プログラムは継続し、種々のデータの蓄積が望まれる。